

教員活動状況報告書

提出日：令和 5 年 2 月 21 日
所 属： 獣医学部 獣医学科
氏 名： 福山 朋季 職位： 准教授
役 職：

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

（教育活動について何をやっているのか：役職担当・主要担当科目リスト（必修，選択）
（受講者数）（学部向け，大学院向け）（學理データ活用）

教師として何に責任を負っているかを明確にし，自分が担当している授業科目に関して
数行で説明する。（分量の目安：2～5 行（80 字～200 字）（科目表以外））

※分量（字数）はあくまで目安ですので，超えても構いません。内容を優先して下さい。（以下同じ）

- 毒性学講義：毒性学の獣医師教育コアカリキュラムに準拠し，国家試験に対応できるような授業内容，授業資料および期末テスト内容を作製する。その前提の上で，常に変化しつつある毒性学や国際的ガイドラインの考え方について情報共有できるように努める。
- 毒性学実習：人体薬，動物薬，農薬等の安全性を担保するために試験法を習得させると共に，毒性学に関するグループミーティングとプレゼンテーションを行う事により双方向性の授業に心がけた。獣医師の専門分野の一つとしての毒性学の社会的ニーズを共有する事で，就職支援にも役立つような内容を心掛ける。
- 総合獣医学：国家試験対策のために毒性学講義の内容をおさらいすると共に，該当学生受講時から変更が加わった部分について重点的な情報提供を心掛けている。国家試験に直結する内容を心掛け，練習問題等の作成を実施している。
- 専門学外実習：コロナ禍で実習先の確保に苦闘している学生に寄り添い，特に企業におけるインターンシップや就職情報を独自ルートで集め，学生にフィードバックする事で，学生に獣医師としての職域の広さや，将来の希望を持たせるように心がけている。
- インターンシップ実習：4 年次の科目である事から，獣医師としての職域についての基礎情報の提案，就職活動を行うにあたってのビジネスマナーや SNS 等の秘密保持の大切さを学修できるような内容を心掛けている。企業就職については，就職活動の仕方，開始時期についてもアドバイスを与え，必要に応じてインターンシップ先の紹介を積極的に実施している。
- 卒業論文・獣医学特論・専門ゼミ・科学の伝達：研究室活動は，社会に出る上での準

備期間と位置づけ、研究活動を通じて自分の特徴や武器を身に着けさせることに主眼を置いて実施している。卒業研究も単に研究を遂行するだけでなく、共同研究先企業との通信や実験データの報告等、研究を取り巻く企業との接点も積極的に取らせている。学会発表や論文発表も積極的に実施させている。

科目名	学科・専攻	必，選， 自	配当年次	受講者数
毒性学	獣医学科	必修	3年次	149
毒性学実習	獣医学科	必修	4年次	139
総合獣医学	獣医学科	必修	6年次	152
専門学外実習	獣医学科	必修	5年次	144
インターンシップ	獣医学科	選択	4年次	30
卒業論文	獣医学科	必修	6年次	3
卒業論文	動物応用科学科	必修	4年次	3
獣医学特論Ⅰ	獣医学科	必修	5年次	2
獣医学特論Ⅱ	獣医学科	必修	6年次	3
専門ゼミ	動物応用科学科	必修	3, 4年次	4
科学の伝達	動物応用科学科	必修	3, 4年次	4

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

1. で説明した教育面での責任を基にしながら自分の教育理念に基づいて自分の教育アプローチについてまとめる。（自分の教育アプローチの説明：なぜやっているのか，自らの信念，価値，目指すもの）（分量の目安：8～12行（320字～480字））

国家試験の合格はもちろんの事，その後の社会で活躍できる人材を育成するための専門教育機関となる事を理念に，講義，実習および研究活動を実施している。特に，日本における人口の減少および高齢化に伴い，飼育されるペットの数も減少しており，首都圏を中心に動物病院間の競争も激化している。生存戦略としての専門性獲得は最重要領域であり，講義や実習はもちろん，研究室活動においても獣医師免許取得後の専門性獲得を理念および目標としている。専門性獲得は，小動物臨床獣医師に限ったことではなく，産業動物獣医師，公務員，企業等の研究員が活躍する上でも必要不可欠である。卒業研究においても，卒業研究のためだけの研究は実施せず，企業との共同研究等社会に実装可能な研究や成果を出すプロジェクトに学生を参画させ，社会で実際に必要な知識を身に着けると共に，企業との通信やプレゼンテーションといった実社会で必要な知識を身に着けさせるようにしている。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

教育の目的と目標（これまでの教育経験においていつも行っていること。重要視していること。自分の教育を特徴づける方法）（分量の目安：15～24 行（600 字～960 字））

授業，実習，研究室活動（卒業研究）の全てにおいて，社会に貢献できる人材を教育する事を主眼に学生へのアプローチを行っている。毒性学講義においてもコアカリ準拠や国家試験対策だけではなく，獣医師として毒性研究に現場で従事していた経験を活かして，毒性学がどのように社会で活かされるのか，どのような変革が行われているのか，獣医師としてどのようなことが求められているのかを，学生の考えを強調してお互いに共有するように心がけている。毒性学実習についても，実験方法の伝授だけではなく，実習を通じて学生の職域を広げる取り組みや専門学外実習およびインターンシップ実習とも連携させて，就職活動にも繋げられるような助言を行っている。

アクティブラーニングについての取組

毒性学実習では毒性学に関するテーマを班ごとに設定し，授業期間を通してそのテーマについての学習や議論をグループで実施させた。さらに最終授業で班ごとにそのテーマに関して 10 分間のプレゼンテーションを行わせ，各班のプレゼンテーションの評価は学生に実施させた。授業の意図としては，現在問題となっている毒性学についての問題を，様々な観点から学習する事と，自分の考えをより効果的に他者に伝えられる技術を身に着ける事にある。自分の予想よりも学生同士で活発な意見交換が行われ，プレゼンテーションの準備過程で質問に来る班も非常に多く，学生間そして学生と教員間での双方向授業に一定の効果があったものと理解している。卒業研究についても，研究のための研究ではなく，自分の研究をいかに社会に還元するかを考え，学会発表や共同研究企業とのディスカッションにも積極的に参加させている。

ICT の教育への活用

動物愛護法の改訂を含め，近年の動物愛護に関する関心の高まりから実習内での実験動物の使用についても変革が求められている。毒性学試験は従来，動物を用いた試験が主であったが，近年では細胞等を用いた代替法の開発が進んでいる事から，毒性学実習においても動物を用いない代替法の採用を積極的に実施している。次年度以降は，さらなる使用動物の削減を目指し，専用アプリケーションの作成や動画を用いた疑似演習の施行など ICT の利用を積極的に進めて行きたい。研究室活動については，ゼミや各研究班の打ち合わせには，オンラインツールを積極的に活用した。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）（分量の目安：15～24 行（600 字～960 字））

現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

(①から⑤まで個別に記載又は①から⑤までまとめて記載ください)

①教育(授業, 実習)の創意工夫(A~C) : A

②学生の理解度の把握(A~C) : B

③学生の自学自習を促すための工夫(A~C) : B

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)(A~C) : B

⑤双方向授業への工夫(A~C) : B

※A(十分実施している) B(実施しているが十分でない) C(うまく取り組めていない)

麻布大学に在籍される学生の7割が小動物臨床を目指している現状を踏まえ、毒性学講義および毒性学実習のいずれについても、単純に毒性学の基礎的な内容を教えるのではなく、薬物の毒性を知る事が将来の小動物臨床にどのように関連するのか、動物や飼主さんの利益に繋がるのかを伝えるように工夫している。結果として、毒性学を単位習得のための授業としてとらえるのではなく、卒後教育にもつながっている事を学生にも理解させ、自学自習やコミュニケーションにつなげるようにしている。毒性学講義では学生からの質問も多く寄せられ、将来への相談なども増えたことからコミュニケーションの獲得に工場があったと考えている。授業の最後に小テストを出題し、次の授業の最初に答え合わせをすることで、学生の自学自習促進と、復習を両立することができた。毒性学実習では、毒性学の時事的な問題に対するグループディスカッションおよびプレゼンテーションを課すことによって、教員も知らないような専門的な知識を自分たちの足で習得し、他の学生にフィードバックする双方向授業が可能となった。研究室活動に関しては、指導学生3名が卒業研究上位10位以内に入り、うち一名は小泉賞を獲得した。動物応用科学科の学生も修士課程に進学する学生が継続して所属してくれており、研究意欲の向上につながっていると考えられた。

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。(V 学科, M 学科の教員の方のみ記載してください。)

毒性学講義の期末試験では、国家試験と同じ問題形式を採用する事で、CBT や国家試験対策に繋がると考えている。総合獣医学講義では、過去問を中心に時事問題も絡めながら国家試験対策を実施した。

5. 学生授業評価(分量の目安: 4~7行(160字~280字))

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

今年度は学生より直接反響を得ることができたため、学生からの要望をすぐに授業や復習教材に反映することができた。対面授業においても、授業の不足部分等をオンデマンド教材で補うなど、今後にも活かせる工夫ができたと考える。

② ①の結果はどうでしたか。

学生からの要望をすぐに授業や復習教材に反映することができたため、学生からは良い反応が得られたと考える。来年度以降も対面授業で学生評価をできるだけ迅速に授業内容に反映していきたいと考える。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組めますか。

今年良かった点を踏まえつつ双方向性の授業・実習に取り組みたいと考える。また、オンライン授業で培った技術を活かして、授業の不足部分等をオンデマンド教材で補う、期末試験のまとめを動画でフィードバックするなど、ICT教材は活用していきたい。

6. 学生の学修成果（分量の目安：4～7行（160字～280字））

① 学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

（参考となる取組については、学内で共有させていただく予定です。）

毒性学実習におけるプレゼンテーションは、毎年同じ趣向ではなく、その時々に応じて趣向を変えたものにする予定である。また、期末試験も各4年間同じ形式をとってきたが、やはり過去問に頼った勉強方法になる傾向が強いため、定期的に形式を変更する事でテストのためだけの勉強にならないような工夫をしたい。

② 教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

授業内で毒性学に獣医師としての役割、職域について説明した所、将来の就職活動に関する相談をしに来てくれた学生が毎年20名以上いる。そうした学生が実際の就職活動でも成功を取めている事例が毎年増えており、自分の経験が学生の将来決定の役に立っていることを肌で実感している。コアカリや国家試験対策だけではなく、学生の将来の方向性を決定する上でも一定の寄与が出来たのではないかと考えている。

7. 指導力向上のための取組（FD研究会参加状況）（分量の目安：1～2行（40字～80字））

指導力向上のため、FD研究会や有志の研究会に積極的に参加した。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

教育活動に関する今後の目標を記載してください。短期的な目標と長期的な目標を分けて記載してもかまいません。（分量の目安：3～6行（120字～240字））

国家試験に合格して獣医師となる事がゴールではなく、獣医師となってから実社会で活躍できる専門家育成を目指すため、毒性学講義では、毒性学を学問としてだけではなく、

卒後教育，小動物臨床領域等でいかに活用するかを伝えていきたい。実習は，その専門家教育をさらに進歩させて，獣医師として毒性学を通してどのように社会に貢献できるのか，活躍できるのかを共有できるような実習としたい。卒業研究および研究室活動は，学生にも関わらず多くの学会発表や誌面発表をこなしてくれる学生が増え，専門家育成機関としての目標に近づいている事を感じている。今後も，学生の将来にとって有効な環境作りを進めていきたい。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

※資料については非公開扱いのものもありますので，資料名のみを記載してください。

シラバス，小テスト，レポート課題，試験問題，教材，FDプログラムなどへの参加記録，授業評価データ，授業に関するコメント，指導学生の学会発表などの成果，学生の進路選択への影響についての事実，教育手法等に関する講演の記録及び招聘の要請書類

参考

※ ティーチング・ポートフォリオにおける自己記述を裏付けるエビデンス例

（「実践ティーチング・ポートフォリオ スタータブック」（大阪府立大学高専ティーチング・ポートフォリオ研究会 編）から引用）

（自ら作成するもの）

1. 授業に関するもの

シラバス、小テスト、宿題、レポート課題、試験問題、教材（配布資料、パワーポイント資料など）

2. 教育改善に関するもの

（教育に直接貢献する研究、FD プログラムなどへの参加記録、教育の工夫を示すもの（複数年のシラバス等）、教育活動関連の補助金の獲得

（他者から提供されるもの）

1. 学生から

授業評価データ、授業に関するコメント（授業評価の自由記述やメールのやりとり等）、卒業生から授業や教育についてのコメント

2. 同僚から

授業参観の講評、作成教材についての意見、同僚のサポート実績

3. 大学／学会等から

教育に関する表彰、教育手法等に関する講演の記録及び招聘の要請書類、カリキュラムやコースの設計などについての評価

（教育/学習の成果）

授業科目受講前と受講後の試験成績の変化、学生の小論文・報告書、学生のレポートの「優秀」「平均的」「平均以下」の例、特に優秀な学生についての記録、指導学生の学会発表などの成果、学生の進路選択への影響についての事実、学生のレポートの改善の軌跡